

平成21年度文化庁委嘱事業

「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

－日本語指導者養成－

日本語支援ボランティア養成講座 報告書

平成22年1月

結城市国際交流友好協会

はじめに

本報告書は、文化庁より平成 21 年度「生活者としての外国人のための日本語教育事業」としての委嘱を受けた『日本語支援ボランティア養成講座』の事業内容とその結果について、講師が執筆を行い、とりまとめたものである。

現在、結城市には多くの外国人が居住している。今もなお、外国人の居住者数は増え続けており、今後ますます、住民における多文化共生への対応が求められることになると予想される。

こうした状況に対応するため、結城市国際交流友好協会では、各種交流事業を行うとともに外国人の日本語習得支援のため、日本語ボランティア教室への支援を実施している。

日本語ボランティア教室では、外国人の参加者は増えつづける一方、日本語支援ボランティアが十分に確保できていないという課題があった。

また、日本語ボランティア教室支援者の人材の確保・育成だけでなく、地域社会においても国籍や文化の異なる住民が共に快適に暮らすために住民一人ひとりが生活・日本語支援の意識について共通認識をもつことが問われている。

そこで、外国人に対する日本語指導環境の充実を図り、外国人と接触できる人材を育て、外国人と日本人が共に住みやすいまちとして地域社会が発展することを目的として、本事業を実施した。

なお、本事業を進めるにあたっては、「多文化共生のための日本語指導者養成講座に関する運営委員会」を設置し、5名の委員の方々にご意見・ご提言等をいただき、事業を行った。

本報告書が、地域や学校における多文化共生についての理解促進に役立てれば幸いである。また、講座開催に際して、ご議論をいただいた委員各位、さらに企画運営にご尽力をいただいた実行委員やご協力いただいた方々に対し、ここに厚く御礼申し上げるものである。

平成 22 年 1 月

結城市国際交流友好協会

目次

はじめに	1
1 多文化共生のための日本語指導者養成講座に関する運営委員会	3
2 講座内容	
(1) 全体を振り返って	角田 亮子 5
(2) 第1回	長谷川 恒雄 12
(3) 第2回	本田 亜紀子 17
	金城 明 21
(4) 第3回	寺山 美妃 24
	ジャムパーケーオ ニコム 26
(5) 第4回	ナジミ フェレシテ 29
(6) 第5回	松浦 みゆき 32
(7) 第6回	松浦 みゆき 35
(8) 第7回	松浦 みゆき 38
(9) 第8回	角田 亮子 41
(10) 第9回	角田 亮子 44
(11) 第10回	角田 亮子 47
3 アンケート	
(1) 講座事前アンケート（平成21年9月4日実施）	50
(2) 講座修了アンケート（平成21年11月13日実施）	61
4 参考資料	
日本語支援ボランティア養成講座 講座内容一覧	69
日本語支援ボランティア養成講座 受講者数	70
日本語支援ボランティア養成講座 受講者の感想	71

多文化共生のための日本語指導者養成講座に関する運営委員会／実行委員

多文化共生のための日本語指導者養成講座に関する運営委員会における委員構成及び講座に関する企画及び運営を行った実行委員の委員構成は以下のとおりである。

多文化共生のための日本語指導者養成講座に関する運営委員会

本委員会は、「日本語支援ボランティア養成講座」の基本方針や実施内容・方法について検討し、実施成果のとりまとめを行った。委員は、以下のとおり。（敬称略・順不同）

平塚 到	結城市国際交流友好協会会長
黒田 吉則	結城市国際交流友好協会副会長（結城市立小中学校校長会会長）
富永 立子	結城市国際交流友好協会監事（日本語ボランティア教室のびる会代表）
渡部 良英	日本語ボランティア教室のびる会メンバー
長谷川 恒雄	大東文化大学日本語学科教授／学校法人長沼スクール非常勤研究員

《第1回》

1. 日時 7月29日（水）午後4時～
2. 場所 結城市役所 第3会議室
3. 議題
 - （1）文化庁委託事業「生活者としての外国人のための日本語教育事業」の概要について
 - （2）多文化共生のための日本語指導養成講座について
 - （3）その他

《第2回》

1. 日時 10月23日（金）午後4時～
2. 場所 結城市役所 第3会議室
3. 議題
 - （1）多文化共生のための日本語指導者養成講座
「日本語支援ボランティア養成講座」の進捗状況について
 - （2）その他

《第3回》

1. 日時 平成22年1月22日（金）午後1時30分～
2. 場所 結城市役所 第2会議室
3. 議題
 - （1）多文化共生のための日本語指導者養成講座

- 「日本語支援ボランティア養成講座」の報告について
- (2) その他

実行委員

実行委員は、「日本語支援ボランティア養成講座」に関する企画及び運営を行った。また、「多文化共生のための日本語指導者養成講座に関する運営委員会」に出席し、実施内容・方法について検討した。委員は、以下のとおり。（敬称略・順不同）

角田 亮子	宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程／日本語ボランティア教室のびる会メンバー
本田 亜紀子	結城市小中学校日本語指導協力員
山田 忠治	日本語ボランティア教室のびる会メンバー
橋爪 ゆり	日本語ボランティア教室のびる会メンバー

日本語支援ボランティア養成講座

全体を振り返って

角田 亮子

1. はじめに

今回、結城市での日本語支援ボランティア養成講座の企画・運営に携わらせていただいた。企画に関しては、昨年の2月頃から市企画政策課の担当者と打ち合わせを始め、講座内容の決定、講師への依頼を行った。運営に関しては、各回の講師との連絡、打ち合わせ、準備の他、講座全10回のうち1回～7回までにファシリテーターとして、8、9、10回は講師として参加させていただいた。ここでは、今回の講座の目的と、各回の振り返りをさせていただく。

2. 目的

今回の講座10回の内容は、日本語支援・共生問題に関する講義から始まり、基礎的な日本語教授法、異文化接触と、大変幅の広いものとなった。通常行われる地域の講座では、日本語教育、もしくは異文化接触のどちらかに重点を置くものが多い。しかし、今回結城市で開講する講座ではあえてどちらも含める内容とした。なぜなら、今結城市に必要な日本語支援者は、日本語教室で活動する者だけではないからである。結城市は、人口に占める外国人の割合は3.5%と大変高いが、全体の人口は決して多くはない。このような状態で日本語教室のような特定の場所での活動者を増やす、また、そこでのみ共生問題への取り組みを行い、情報を発信していくことはなかなか難しい。結城市に今必要なのは、地域全体で共通認識を持つこと、個々の立場から行える日本語支援の形をそれぞれが探ることだと考え、今回の講座を企画した。

受講者は殆どが結城市民であったが、中には近隣の市から、また県外から参加する者もいた。受講者の所属や参加理由も様々だった。日頃町内会で活動している者が、今後同じ町内に住む外国人との関わりをどうしていくか考えるため参加したり、以前、海外でお世話になった者が今度は自分が日本で恩返しをしたいという理由で参加したりもした。市内の小中学校からも6名の教師が参加した。様々な立場から共生問題に取り組める可能性が高まる中で開催に至ることができた。

3. 各回の振り返り

今回の講座では、受講者同士がより多くの者と知り合うために、席決めは毎回くじ引きとした。日本人同士打ち解けるのに時間がかかるかと少し懸念もしていたが、参加の目的が同じためか、皆、第1回目から積極的に意見交換をしていた。教室全体も和やかになり、くじ引きでの席決めは効果があったように思う。

第1回 多文化共生と日本語支援 （長谷川 恒雄先生）

長谷川先生には、移民受け入れの問題から、日本国内の日本語教育機や日本語支援、日本語教育の対象者が留学生から地域の生活者まで多岐に渡るようになったこと、年少者が抱える問題など、共生問題に関わることを幅広くお話いただいた。約1時間の中でお話いただくには大変中身が濃く、受講者にとっては少し量が多かったかもしれない。しかし、国内における日本語教育の全体像をお話いただいたことで、受講者は現状や課題を理解しやすかったように思う。なぜなら、このような問題は各分野、各部署が単独で抱えているわけではなく、全てが絡み合っているからである。行政や教育機関、市民との連携の必要性や、市民ボランティアだからできることなど、様々な可能性もお話された。

年少者教育にも触れられた。教科日本語と生活日本語はどのように違うのか、大人とは違う言語習得期にある子供たちへの指導などは、次回の本田さんのお話に繋がるものであった。

日本語学校の日本語教育とは違う、地域住民に必要な日本語支援とは何か。生活に必要な日本語は何なのか。日本語教師とは違う、日本語支援ボランティアの専門性について受講者は考えることができる機会となった。

第2回 結城市民の声を聞こう （本田 亜紀子さん・金城 明さん）

まず初めに、受講者の自己紹介を行った。受講者全員が一度に自己紹介する時間がとれないため、今回は半数、次回の3回目で残りの半数が自己紹介を行うということにした。日本人は控えめ、謙遜が美德とされるが、一人約1分で、できるだけ自分をアピールするように伝えた。今後結城市で同じように意識を持って活動する仲間同士知りあう必要があるからである。また、各回の最後にグループで意見交換をする際、それぞれの意見がどのようなバックグラウンドによって出されたものなのか考える必要があるからである。こう

いった理由を受講者に説明し、手本としてまず実行委員2名の自己紹介をしたところ、その後続く受講者たちも上手に自己紹介をした。日頃の活動や仕事、参加を決めた理由、海外旅行や滞在の経験など、それぞれの考えやバックグラウンド聞くことができ、大変有意義な時間となった。

次に、市内の小中学校で日本語指導協力員として活動している本田さんのお話を伺った。市内の日本語支援を必要とする外国人児童生徒数や、実際の日本語支援の様子、現場が抱える問題や今後の課題など、とても具体的なお話だった。外国人児童生徒、保護者、学校が抱える問題は、日本語教育や教科教育、異文化理解教育、情報の伝達、母語継承問題など多岐に渡る。普段外国人児童生徒と関わることのない受講者も同じ地域に住む子供たちの成長に関して多くのことを考えさせられたに違いない。

本田さんのお話の後に、中学3年時にブラジルから来日した金城さんのお話を伺った。金城さんには実際外国人生徒として日本の中学、高校で過ごした者の立場からお話していただいた。言葉や文化の違いにより生じた誤解や不安、周りの人々に助けられた経験、自己の努力などをお話してくださった。「外国人児童生徒が希望を持てるような環境・学校教育」という話があり、それについて受講者からもいくつも感想が寄せられた。子供たちには将来があり、多くの可能性がある。日本国内では外国人児童生徒は義務教育ではないが、学校教育関係者や地域の人間が、国籍問わず子供たちを育てていくことは“義務”なのではないだろうか。受講者の中から、「教科書に振り仮名をふるなどのボランティア活動ができるならぜひしたい」という意見が出た。今後結城市が、様々な人の力を借りながら、子供たちの成長に手を差し伸べられるようになることを願う。

第3回 結城市民の声を聞こう (寺山 美妃さん・ジャムパーケーオ ニコムさん)

まず初めに、前回に引き続き、受講者による自己紹介を行った。前回同様、それぞれ思い思いのアピールをし、お互いを知り合う良い機会となった。受講者の感想にも、「アピールするのはなかなか難しいが、自分を表現する良い機会となった」などの意見がみられた。

次に、国際結婚をした主婦の立場から、寺山さんにお話しをしていただいた。結婚を機に母国である中国を離れ来日し、日本で子育てをすることになる。言葉がわからず不安も多かったが、幼稚園の父兄さんや先生方に助けられ、日本で子育てを頑張ることができたという。また、地域の日本語教室のあり方についてもお話してくださった。地域の日本語

教室の役割は、日本語学習の場の提供だけではない。日本の文化や生活のルールを学ぶ場、友達作りの場としても大変大きな役目を果たしているということだった。この講座では、受講者に日本語支援の形には様々な形があることを伝えたいと考えていた。決して外国人に日本語を教えることだけが支援でないということが伝わっただろう。また、日本語教室において多くのことがなされていることから、一つの団体や機関が一つの機能のみ果たすわけではないことも伝わったはずである。

次に、タイからの研修生であるニコムさんにお話しをしていただいた。結城市には多くの研修生がいるが、普段関わりのない日本人にとっては、彼らの実態は謎である。どのような目的で来日したか、普段どのような生活をしているか、日本に対してどのような思いがあるかなど、受講者は大変興味があっただろう。もちろん、ニコムさんのお話によって、電車の乗り方や文化の違いなど、外国人が日本で生活する上で困ることを受講者が気づくこともできたが、職場で真面目に仕事をしたり、日本のお祭りを楽しんだりということから、彼らが決して異質な存在ではないと理解できたのではないだろうか。日本語を勉強し始めて1年ほどで、自身で書いてきた原稿を読みながらのお話だったが、受講者はニコムさんの丁寧な話にじっと耳を傾け、時に彼のユーモアのある話に笑いが起きたりもした。

最後に、タイの楽器であるピンをニコムさんが披露してくださった。タイでも若い人ではなかなか弾ける人がいないらしく、私たちにとって、大変貴重な体験となった。受講者の感想に、「タイの楽器を演奏しているニコムさんから、タイへの誇りが感じられた」というものがあつた。つたない日本語であっても、人として劣っているわけではない。ニコムさんの持つ文化を尊重してこの第3回を終えることができた。

第4回 異文化体験をしよう～ペルシャ語で“こんにちは”～（ナジミ フェレシテさん）

この回では、イラン出身のフェレシテさんに講師として参加いただき、ペルシャ語のみによる授業を行っていただいた。

まずこのペルシャ語の授業を企画した理由だが、受講者に“言葉が伝わらない場面”と“共通語を持たない学習者に日本語を教えるための直接法”を経験してもらうためであった。フェレシテさんの日本語は上級レベルだが、初めからフェレシテさんが日本語を話せることは伏せておいた。受講者がこの場での日本語の使用を諦め、恥ずかしがらずにペルシャ語を話せるようにするためである。フェレシテさんの授業は直接法なのでペルシャ語

で行い、私とのやりとりは英語で行った。受講者は初め、緊張した面持ちだったが、授業開始と同時に大きな声でペルシャ語をリピートし始めた。意味がわからなくてもリピートし、フェレシテさんの動作や表情から意味を推測していく。時には絵カードを使用するなどして、直接法のコツも多く取り入れられた授業だった。ペルシャ語によるジョークも受講者には通じ、始終笑いの絶えない授業であった。講師が教えようとしていない語彙でも理解できるものがあるのはなぜか、受講者と考えることもできた。楽しく終わったペルシャ語の体験でも、やはり始終緊張していた、言葉がわからないストレスを感じたという感想が挙げられた。受講者がこの体験で感じたことを、次に外国人と日本語で接する際に思い出してもらえればと思う。

第5回、第6回、第7回 日本語の教え方の基礎 (松浦 みゆき先生)

この3回では、松浦先生に基本的な日本語の教え方・考え方を教えていただいた。この3回には、日本語教育を知らない人たちに日本語教育を伝えるための松浦先生のアイデアが盛り込まれていた。まず、日本語教育文法と国文法の違いを確認したことで、受講者は日本語教育が全くもって別分野であることを知ることができた。動詞の分類（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲグループ）や“て形”（例：書きます→書いて、言います→言って）を作る際は、規則に従い外国人がどのように分類するかを体験するため、実際にはない作られた単語を使用し、受講者も分類の体験を行った。テキストや副教材の使用法、授業の組み立て方も一つ一つ丁寧に教えていただいた。第7回目では、実際にのびる会に勉強に来ているベトナム人3人に参加してもらい、授業のデモンストレーションを行っていただいた。導入、インプット、アウトプットなど、5回、6回で勉強してきたことがどのように繋がるか、受講者も理解することができた。

ただ、県の養成講座が全30時間以上と指定されていることからわかるように、日本語教授法を3時間で網羅するのは無理である。もともと日本語教授法に重点を置く講座として考えていなかったため、基本のみを3コマでお願いしたが、それでも受講者にとっては負担が大きかったように思う。それだけ、日本語を教えるのには知識と経験が必要となるということだろう。しかし、ここで日本語教授法を取り上げたことで、受講者自身が“外国人に対して日本語を教えること”と“生活のサポートをすること”と、どちらに興味があるか気づく機会になったようだ。「次回は日本語教授法の講座を受講したい」という感想

も挙げた。また、松浦先生は、「日本語を教える知識がある A さん」と、「日本語を教える知識は無いが買い物に一緒に行きましょうという B さん」の両者が、地域の日本語支援には重要だということを一貫して仰っていた。このことにより、受講者には自身の活動スタイルを考える機会となり、また、自身とは違う形での支援者を尊重する気持ちが生まれたと思う。

第 8 回 やさしい日本語の作り方 （角田 亮子）

この回では「やさしい日本語の作り方」をとりあげた。日本語を教える者でもそうでない者でも、共通語を持たない外国人と接触した際は、相手が少しでもわかる日本語を使ってコミュニケーションを図ることになる。弘前大学人文学部社会言語学研究室が開発した災害時のための「やさしい日本語」が、近年では各地で国際交流用に使用されている。結城市でのこの講座でも、日本人側が日本語レベルをコントロールして外国人と接する方法を紹介した。また、案内を作成する練習として、市役所 HP に掲載されている「外国人相談窓口の案内」のやさしい日本語への翻訳、やさしい日本語で話す練習として、ペアを作ったのインフォメーションギャップを利用した活動を行った。

やさしい日本語の作り方のルールを紹介し、受講者と一緒にプリントを進めたが、初めから上手にやさしい日本語を作るのは難しかった。しかし、相手の言語をこちらが知らないからと接触をためらっていた人たちにとっては、コミュニケーションの新たな可能性が見出せたに違いない。一度足を止め、相手の反応を伺いながらコミュニケーションを行う面白さに気づけてもらえていたら有り難い。

第 9 回、第 10 回 外国人と交流しよう （角田 亮子）

この 2 回では、実際にのびる会で日本語を勉強している外国人（タイ、ベトナム、中国、ブラジル）に参加してもらい、受講者がこれまでに学んだことを活かしながら実際に外国人と活動する内容にした。活動内容には、ゴミの分別と防災を用意した。ゴミの分別は、外国人が日本で生活する際に最も難しく、また近所とのトラブルにもなりやすいとされている。また、地震（防災）は日本ならではの問題で、地震のない国から来ている外国人には、それに対する知識や意識は皆無に等しいだろう。この回に参加した外国人にそれらの知識を身につけてもらうため、また、日本人側にとっても今後地域の外国人と関わる際に

話題・問題になるであろうということで、これらを取り上げることにした。

まず初めに、外国人と日本人が初めて顔を合わせたので、お互いが知り合い場を和ませるためにいくつかのゲームを行った。意外にも日本人が積極的で、それぞれが打ち解けるのに時間はかからなかった。

ゴミの分別や防災のタスクも、グループごとに工夫しながら進めていた。ここでは外国人参加者がどれだけ必要な知識を身に付けたかが重要なわけではない。日本人と外国人が意思疎通を図るためにどのような工夫ができたか、相手とペースを合わせて活動ができたかが重要だと考えている。言葉の問題や相手の反応を伺うなどは、まだまだ日本人には難しいようだったが、絵や物を使い工夫しながら説明をしたりしていた。また、外国人と話をするために自ら席を移動したり、身を乗り出したりしている者もいた。このような小さなことも、相手と積極的に関わろうという意思の表れであり、とても大切なことなのだと考えている。また、こういう気持ちはきっと相手にも伝わる。今後外国人と日本人が関わっていく最初の一步がここに見えたように思う。

4. まとめ

受講者それぞれが今後の自身の日本語支援への関わり方を考えたところで全 10 回を終えることができた。先にも述べたように、今回の講座は大変内容の幅が広いものとなった。そのため、一つのことを突き詰めて学習し身につけられたわけではないが、市民や教員など横の繋がりが持てたこと、受講者それぞれがどのような形の支援方法があり、どのように関わっていきたいか考えるきっかけとなったのは私の目的とするところであった。また、私にとっても、この講座の運営に関わることで、企画政策課をはじめ、市役所の生活環境課などの他部署や、学校教育関係者、市民と繋がることができ、大変感謝している。

このような講座を受講した者が、今後この場での経験をどのように活かすかはまだわからない。活動の場の確保、体制作り（各部署同士の連携を含む）、更なる知識の習得、コーディネータ等の人材確保など、マニュアルのない地域づくりに思考錯誤を繰り返しながら挑まなければならない。今後、市全体がどのような方向に進むのかもまだわからないが、町内や行政、学校教育機関等に少しずつまかれた種が芽を出し、様々な立場からの共生問題への取り組みが、いずれ市全体に浸透し、共生問題に対する意識の底上げに繋がることを願っている。

日本語支援ボランティア養成講座

第1回 多文化共生と日本語支援

長谷川恒雄

日時 9月4日（金）

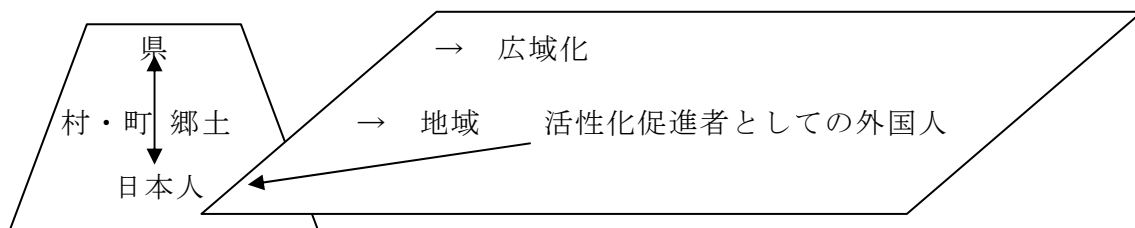
場所 結城市民情報センター3階会議室

§ 現代：近代から次の時代への模索の時代

- ・今日の日本語支援ボランティアを考えるに際しては、現在の日本が大きな歴史的な転換期にあることを意識しておく必要がある。今日は「国家、中央」が権威をもって社会のすべてを引っ張っていった「近代」から、次の時代「ポストモダン」の時代に移行し始めた時代に当たる。近代においては、少数者（地方、方言、外国人）はどちらかといえば疎んじられてきたが、ポストモダン時代において少数者はむしろ生き活きとした活動の中心に位置すべき存在であり、外国人に対する権利・人権もその国で生まれた「国民」と同等のものを国際社会は求めるようになっていく。
- ・近代社会が国民によって構成され、人口圧に悩まされていたのに対し、今日は人口減により社会は国民だけでは維持できなくなり、外国人を「移民」として導入し維持を図らなくてはならなくなっている。世界中の先進国がこのような状態にあり、言語教育の問題も国民に「標準語」を教育（国語教育）していけば済むというものではなく、移民に対する当該国言語の教育（以下、第2言語教育と呼ぶ）をどうするか、という新たな問題の中で考える必要が生じている。日本語教育もこの視点の中で捉える必要がある。

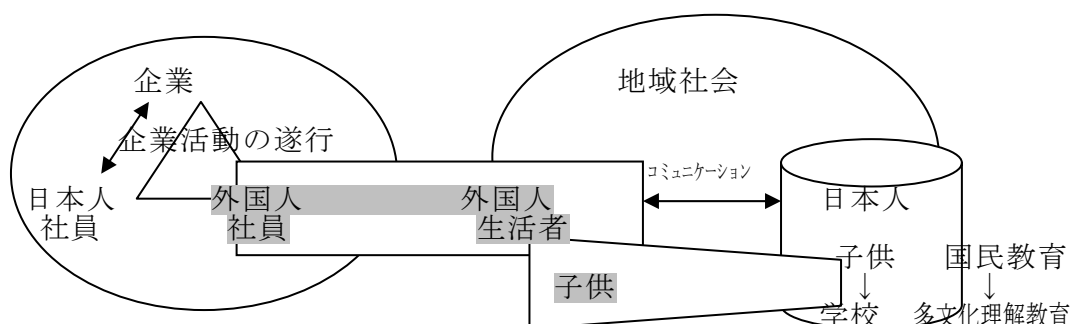
国語教育は「書き言葉」の教育を中心としていたが、これは就学以前に「話し言葉」を身につけていたことを前提としている。第2言語教育では「話し言葉」をどう習得してもらい、日本人との意思疎通をどのように支障のないものにし、社会を安定して維持できるかを問題としている。

- ・近代の中で培ってきた日本人社会は、下図左の台形のように、県・村といった郷土に支えられ成り立ってきた。しかし、社会変化によりこの姿は変容を迫られ、県レベルでは広域化が進み、村・町レベルでは「地域」という言葉が使われるようになっていく。



人の移動が頻繁になると、自らが住んでいる土地を「郷土」といった愛着をもって接することは稀となり、新たな語が必要になる。「地域」という語にはそのような状況が込められていると私は考え、その地域の活性化を助けてくれるものとして地域の居住者としての「外国人」を捉えている。上図の右菱形にその関係を表したが、この2つの関係をどのように構築していくかが今後求められるところとなろう。

日本人と外国人の問題に絞って考察を進めると、1つの地域社会を維持していく（共生社会の創造）ためには両者の間の意思疎通すなわちコミュニケーションの問題を考えないわけにはいくまい。日本語によるコミュニケーション能力の育成手段としての日本語教育に地域がどのように取り組んでいくかは、単に外国人を支援するというより日本人が自分たちの将来社会をどのような設計していくかに関わる重要な課題なのである。



上図において外国人は、網掛けをした部分に位置し、左側の円内においては企業内での労働への従事、右側の円内では生活者としての地域社会への参加、という2つの側面で行動していることを表すが、その両局面において日本社会は日本人だけで構成される日本語単一社会からの変容が迫られていることが分かる。また、その子供の教育においても学校教育そのものを、国民教育を超越した多文化教育に変容していく必然性があるという問題提起を表し、早急にその解決法を打ち出す必要が出てこよう。

- ・「外国人労働者の受け入れに関する世論調査 2004 内閣府調査」によると、受け入れ環境整備は、「あまり進んでいない」とする者は46.7%にも達し、その内訳上位は「社会保障や教育などの制度」54.5%、「外国人と共生する文化」44.2%、「地域社会における日本

語教育などの支援体制」41.9%となっている。

- ・現在の日本国家の基本的枠組みは近代の延長線上にある。主権は国民にあり，国民利益のために法・制度の枠組みが成り立っている。従って，行政は「近代の枠組み」の中でしか機能できず，どこまで「外国人との共生に有効」なのかは問題となる。

一方，市民のボランティア活動は，国を超えて人間的な「交流」を可能とする。

現段階での我々の「多文化共生と日本語支援」は限りある行政の活動と，「夢」を抱えるボランティア活動の狭間で動いていかなければならない歴史段階にある。

§ 新社会創造のための外国人支援

- ・現在の行政にできることもある。例えば，「公的情報の伝達支援（市の広報・道路標示の多言語化）による情報の共有（日本人・外国人）化」，「聞いてあげるという態度」，「学校教育の中の日本語教育の充実」などの活動であり，これを通して外国人が安心して生活できる社会づくりが目指せよう。
- ・市民ボランティアの活動としては，現在2つの方向性が試みられている。

1) 生活支援

病院，買い物など，あらゆる生活情報の提供。外国人と一緒に行動してあげる中で日本社会での行動を理解してもらい，1人での行動が可能なレベルまでに支援する。

2) 日本語支援

いわゆる「地域の日本語教育」を指すが，その姿は一様ではない。

単に学習者の文法力を伸ばせばよいのか，コミュニケーション力を育成すべきか，教える人は教師・上位にいる者として行動すべきか，学習者と同じ目線に立つ支援者であるべきか，考えていくべき課題は多い。

また，学習者の側に日本語教室を「安らぎの場」として捉えることもある。安らぎが家族内に求められる場合，親子参加型の日本語教室の運営が求められ，育児施設を設ける必要も出てくる。

外国人の安らぎが日本社会に向けられたものである場合，日本語支援者は安らぎの提供者役も果たさねばならず，教科書を離れた普通の日本語を用いたコミュニケーションの場を教室内に再現しながら，日本人のコミュニケーション行動のあり方を解説し，対処訓練をすることになる。同時に，外国人学習者から出る日本人社会への発言・要求を，日本人社会に伝える役割を日本語支援者は抱えることにもなり，日本語支援活動は，日

本人と外国人の共生に対する「思いを形にする」活動でもあり、外国人と地域を結び付ける機能を担うものであり、日本語学校の日本語教師とは違う資質が要求される。

§ 日本語教育

- ・第2次大戦後の日本語教育施策は、留学生に対する日本語教育を中心として展開しており、文化庁では統計整理上これを「大学等」としてまとめる。それ以外は「一般」としてまとめられるが、今日では「一般」が過半数を占めるに至っている。この「一般」の施策の整備は遅れているが、「一般」は、「生活目的」と「学業目的（進学、就学、研究等）」（日本語教育振興協会認可校）に2分された教育（「現実の日本語教室（一般日本語教育）の運営」のあり方 H19 文化庁による）が行われており、この分類においては地域の日本語教育は「一般」の「生活目的」に属していよう。

- ・留学生に対する日本語教育は「文型積上げ教育」を行ってきた。第2言語教育では「教授法」が重視され、教師と学習者との間で「文型」を中心とした「問答」を行いながら、文型が使えるように練習し、文型は「易→難」に「積み上げ」られていく。

教師：これはペンですか。 学習者：はい、そうです。

教師：あれは本ですか。 学習者：はい、そうです。あれは本です。

教師：それは何ですか。 学習者：これは辞書です。

- ・学習者の年齢による習得のちがい

子供が言葉を覚えるのがはやいのは「言語獲得装置」が機能しているからであり、大人が外国語を覚えるのに苦労するのは、装置が消滅してしまうからである。教授法という思想は、この違いを考慮していないが、日本語の学習者は大人も子供も存在する

- ・言語変種の教育の必要

若者言葉、男（女）言葉、方言などを言語変種という。日本語教育で扱う文型は言語変種よりも高度に抽象化されたものであり汎用性はあるが、学習者が現実には日本人とのコミュニケーションで遭遇するのは、様々な言語変種の方であり、教科書で習った日本語と日本人の話す日本語が違ふとの苦情となる。日本語支援でも言語変種の扱い方を考慮する必要がある。例えば、年少者の日本語支援では、教科で用いる「教科書」の日本語と、友だちと遊ぶときの日本語が異なる。どちらもできなくては健全なパーソナリティの育成には繋がらない。

また、地域の日本語支援は、一般的に話し言葉によるコミュニケーションが強調され

るが、介護士の日本語支援では、患者との音声によるコミュニケーションも必要なのだが、同時に介護の「専門用語・その漢字表記」も必要となり、ある意味で留学生の教育に近いところも出る。

- ・文化・発想に絡む問題

コミュニケーションの中における意味は、文法上からの理解とずれることがある。

「家の子は出来の悪い子でして---」は、「お宅のお子さん、大きくなりましたねえ。」の応答であるときと、「お宅のお子さん、もうちょっと勉強してもらわないと、受験無理ですよ。」と教師に言われたときの応答とでは意味が異なる。

「生活目的」のためのコミュニケーションを支援するに際しては、このように「文化」がどのように関わるのか、その「文化」のちがいにどう「適応」したらよいのかが課題となる。

- ・年少者の日本語支援

年少者の日本語支援は、国民教育とは違う原理からの教育の創造が必要となる。外国人子弟を日本国民化するより、帰国後の本来の文化に戻ったときに母文化・言語への「適応」も視野に入れておかなければならない。

日本語支援上では、教科指導の言葉と日本人の友だちとの会話が異なることも困難点となっており、文字・文法の指導だけでは解決できない。「 $9 \div 2 = 4.5$ 」という計算が、母語からなら理解できるが「キュウワルニハヨンテンゴ」という日本語が理解できないのか、割り算という概念がないのか、小数点の概念がないのか、指導上の見極めが必要となり、大人相手の日本語指導とは異なる資質が教師には求められ、教材もそのような多様な現場・多様 needs・多様な使用法に耐えるものが必要であり、同時に現場での工夫・利用の余地を残した素材が求められる。

このように、ポストモダン時代が要求するところは、定型化できるものではなく、その実現に困難を伴うものではあるが、国差条約上（経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約 1979）の受入れ義務はあり、我々はその実現に邁進していかざるを得ない状況にある。

日本語支援ボランティア養成講座

第2回 子供たちの日本語教育と未来～結城市における外国人児童生徒の現状と課題～

本田 亜紀子

日時 9月11日（金）

場所 結城市民情報センター3階会議室

第2回講座は、「結城市民(外国人・日本人)の声を聞こう」というテーマでの講義の第1部として、主に在住外国人子弟の就学に関する話を聴講していただきました。

まず、結城市の小中学校で外国人児童生徒への日本語指導をしている私が「結城市内の外国人児童生徒や日本語指導に関する現状と課題」について話しました。

私は日本語教師養成講座420時間を修了後、結城市ボランティア日本語教室「のびる会」や個人レッスンで数年間日本語を指導し、3年前からは結城市教育委員会の派遣で市内小中学校において外国人児童生徒への日本語指導をしています。

結城市内の小中学校で学ぶ外国人児童生徒の数は129名（2009年6月現在）、そのうち日本語支援が必要な児童生徒数は82名と多く、国籍はブラジル、フィリピン、ベトナムが多いのが特徴です。9つの小学校のうち4校に、3つの中学校のうち1校に日本語教室が設置されていて、要日本語支援児童生徒が取り出し授業を受けたり、日本語教室担当教諭が児童生徒のクラスへ出向き支援をしたりしています。日本語教室がないのに要支援児童生徒がいる学校へは私のような日本語指導員が出向いていますが、時間数が少なく十分な支援はできていないのが現状です。

小中学校の日本語教室には担当教諭が配属されています(本講座にも数名ご参加くださっています)が、日本語指導の専門家ではないですし、日本語教室の運営や指導法、教材等について情報がない中で、先生方は児童生徒一人ひとりの現状に合わせた指導内容を独自に研究し、試行錯誤で日々指導にあたっているようです。特に来日して間もない児童生徒の場合、日本語の初期指導の他にも日本の（主に学校での）生活習慣等の指導も必要です。私はこのような児童生徒を中心に支援活動をしています。

外国人就労者とは違い、学校の子供たちは日常会話だけでなく読み書きが必須となります。日本語教室に通う児童生徒は、日常会話は問題なくても学級での教科学習についていけない子が多くいます。どの教科も、日本語で書かれた教科書を読解できなければならな

いし、テストの際には問題を自分で理解し、自分の考えを書いて表現できなければなりません。日本語教室では、教科書にふりがなをつけて内容を説明したり、テスト問題をわかりやすく説明して個別に受けさせたりすることもあります。

外国人児童生徒は、学校では言葉の壁や文化の違いなどから友達関係がうまく行かない、家庭では昼夜働く両親に構ってもらえず、ストレスをためている子供たちが多く、学校や近所でトラブルとなることも多いです。そういった場合に、詳しい事情を聞いたり、心のケアをするため母語で子供の本音を聞いてあげたりすることができるカウンセラーの必要性を感じています。

日本で生まれたとか、小さいころから日本で育ったという子でも、家庭では両親の母語で会話していると、日本語も母語もどちらも中途半端になってしまう場合が多いのです。日本語がわからない両親は学校の宿題を見てあげることができず、学校からの通知も理解できません。子供は、日常会話は上手になっても、高学年になると教科の日本語が難しく理解できなくなってきました。両親の母語で会話はできても読み書きはできません。親子で意思疎通ができなくなるケースもあり、将来帰国することを前提に、余裕のある家庭では週末に母語を習わせることもあるようです。こうした母語継承問題も外国人児童生徒の抱える大きな問題です。

先にも話したように、教科の日本語は高学年になるにつれどんどん難しくなります。低学年のうちには日本語教室の支援が必要なかった子でも、高学年になると学級での授業についていけなくなり支援が必要になる場合もあります。日本語教室の支援がどこまで必要かを見極めるのは非常に難しいです。また、高学年での来日には、子供の将来が大きく影響します。特に、母国で熱意を持って勉強してきた子が、来日して思うように勉強できず悔しい思いをしている様子は、見ていて辛いです。日本の学校システムや進学・就職に関する情報を保護者に伝え、子供の将来をもっと考えてもらう必要があると思います。

結城市の外国人児童生徒支援に関しては、支援スタッフの確保、支援体制の整備などまだまだ課題があります。日本語初期指導や母語カウンセラーのように専門知識のあるスタッフももっと必要ですし、教科学習の補佐（教科書のふりがなつけやわからない言葉の説明など）などには子育て経験のある主婦や退職された教職員の方などにもご協力いただけるとよいのではないかと思います。

外国人労働者の永住化がますます進む中、子供たちの進学や就職に関する問題が深刻化

してきています。国籍を問わず、子供たちは将来の日本や結城市を担う宝です。地域の子供たちを健全に育成していくのが我々すべての大人の役目だと思っています。

次に、ブラジル出身の金城明さんより「外国人児童生徒の教育と将来」について、ご自分の経験を通して話していただきました。

金城さんは14歳で来日後、努力の末日本の高校・大学へ進学され、現在は結城市役所で外国人相談窓口の通訳として活躍されています。

金城さんの生まれ育ったブラジルは、面積が日本の22.5倍もあり、人口は世界5位、そのうち100万人が日本人移民の子孫であり、世界最大の日系人居住国です。日本からの移民がまじめで勤勉だったことから、日本人はブラジルでは「エリート」というイメージがあるそうです。特に、日系人の多いサンパウロ市（日本とほぼ同じ面積！）には、ラテンアメリカで屈指のサンパウロ大学があり、なんとその学生の15%が日系人なのですか。金城さんは、自分がブラジルに住んでいる時には「自分は日本人だ」ということを誇りに思っていたのに、実際来日してみると「日本人ではなく外国人だ」と実感し、ショックを受けたのだそうです。これは「アイデンティティー・クライシス（自己統一性危機）」というもので、金城さんの場合、自分は日本人と信じて今まで生きてきたのに、日本に来て実際には違っていたことがわかり、自分が何者かわからない葛藤に悩まされたのです。

金城さんは14歳で来日した時、生まれて初めて言語の壁というものを実感したそうです。ジェスチャーでも通じないものがあって、例えば、日本でする「OK」サインは、ブラジルでは相手を侮辱することを意味するそうです。文化の違いや食文化の違いも大きかったそうです。また、学校でのカルチャーショックもかなりあったそうです。ブラジルの学校は私服で、アクセサリーや香水をつけていってもよかったそうです。日本ではそれがダメだということを知らずにつけて行き、いきなり怒られてビックリしたそうです。日本の生活に慣れた今、「ブラジルに帰ったら、今度はブラジルのカルチャーショックにあうでしょう。」と金城さんは笑いました。

当時中学3年生だった金城さんは、来日してすぐにもかかわらず卒業後の進路を決めなければなりませんでした。高校受験を希望したところ、初めは「無理」と言われてしまったそうです。しかし、担任の先生が放課後毎日補習授業をしてくださり、ダメだと思っていた高校に合格することができました。その後の高校生活でも、将来に不安を感じていた

時、担任の先生が「大学受験、やってみれば？」と声を掛けてくださり、応援してくれたのだそうです。金城さんはその声に、「不安の闇に希望の光を与えてもらった」と話してくれました。

今までを振り返って、高校・大学と進学してここまでやって来られたのは、その時々でモチベーションを上げてくださった先生方のお陰だと金城さんは言います。そして、今後外国人児童生徒の支援に関わる方には、子供たちに「将来の希望」を与えて欲しいと語っていました。

金城さんの「子供たちに将来の希望を与えて」という言葉は、とても重く心に響きました。私は、日頃外国人児童生徒と接していて、「この子たち、将来どうなっていくのだろうか？」と心配しながらも何もできない自分にジレンマを感じていました。でも、子供たち自身のほうがもっともっと大きな不安を抱えているのでしょうね。こうした声を多くの人に伝えるのが私の役目なのだと思います。子供たちの両親はもちろん、学校、地域、行政のいろいろな方々に聞いていただき、問題意識を持って今後の対策を考えて欲しいと痛感しました。

今回は、結城市の外国人児童生徒に関して、その実態を受講者に広く知っていただき、問題となっていることを実感し、今後の課題を一緒に考えていただくことが目的でした。受講者の皆さんの中には、学校で毎日直面している先生方もいらっしゃいますが、通学時に見かけるとか、近所で見かけるだけで、実際にどのような問題が起きているのかは本講義で初めて知ったという方も多かったようです。学校の立場（指導する側）からの話だけでなく、実際の生徒の体験談として金城さんの話を聞いたことは、受講者にとって貴重な経験となったと思います。現状を知り、今何が必要か、今後どのような支援がボランティアとして可能かなど、講義後のグループでの意見交換では、様々な意見が活発に出ていました。今回の講義で得た問題意識を、それぞれの受講者が、それぞれの家庭や職場、地域に持ち帰って伝えていただき、様々な場所で小さな支援の種を蒔いていただけたら・・・と思いを馳せました。

日本語支援ボランティア養成講座

第2回 外国人児童生徒の教育と将来 ―日系ブラジル人の立場から

金城 明

日時 9月11日（金）

場所 結城市民情報センター3階会議室

元外国人児童生徒として、来日してからの自分の経験について述べさせていただきたいと思います。まずは、私のバックグラウンドからです。

私が生まれたのは日本のちょうど裏側にあるブラジルという国です。母の家族が戦後ブラジルに移民したため、私は二世の日系ブラジル人です。ブラジル最大の都市であるサンパウロ市で14歳まで生活していましたが、両親の仕事の都合により家族全員で日本に引っ越すことになりました。もともとは先祖の国を知りたくて日本にいつか旅行することは夢の一つでしたが、まさかずっと住むことになるとは思っていませんでした。人生初の海外旅行で、未知の地へ旅立つわくわく感と、親戚や友達と別れなければならないという切なさを抱きながら日本にやってきました。

来日して、最初に「言語」と「異文化」という大きな壁にぶつかりました。日系ブラジル人とはいえ、それまでの日常生活ではポルトガル語しか使わなかったもので、日本に來た当初は日本語や日本の文化が全く分かりませんでした。唯一知っていた日本語は幼い頃に祖父母に教えてもらった「おはよう」と「ありがとう」の2単語だけでした。中学校3年の途中に入り、制服はもってなかったので最初は私服で学校に通っていました。ブラジルで通っていた学校には制服はなく通常は私服で授業を受けていましたので、当時はあまり違和感を覚えませんでした。今思えばかなり目立っていたと思います。そのためか、多くの人が興味を持ってきて声をかけてもらいましたが、相手が発する言葉は理解できず、自分はジェスチャーと片言の英語でなんとかコミュニケーションを取ろうと必死でした。

通常の授業の内容は全く理解出来なかったもので、英語・数学・音楽・体育の授業以外は外国人児童向けの特別な授業で別の教室にて他の外国人児童と日本語を勉強していました。最初はひらがなやカタカナ、小学校低学年の漢字から習い始めました。主にプリントを使った授業なので、会話よりも文法を中心に学びました。

中学校ではいろんなカルチャーショックを受けましたが、その中で一番覚えているのは

文化の違いで生じた勘違いです。日本の学校規則と比べれば、ブラジルの学校規則は緩く、身だしなみに関しては基本的に自由です。整髪料、香水、ピアスなどに関する規則はなく、私は普段から香水を使っていました。同様に香水をつけて中学校に行ったら、一人の先生に指摘され、日本語がまだ不自由だったので「臭い」という言葉しか理解できず、教室からも追い出されました。その時は香水をつけること自体が学校規則に反するということを知らず、その先生はただ、私がつけていた香水は苦手だと勘違いをしてしまいました。怒られたことに対してショックを受け、不快に思いましたが、その後外国人児童の先輩に相談し、自分がいけなかったということを初めて認識しました。自分の国ではなんともないことは違う国でとんでもないことかもしれないという思いから、改めて異文化理解の必要性に気づきました。それ以来はいつも習慣や規則を確認しながら行動することを心がけています。

来日して半年過ぎた頃に高校受験シーズンになりました。異国の地での生活に慣れ始めて、少しは日本語をわかるようになりましたが、授業の内容を理解することはまだできず、高校へ進学できる確率は極めて低くて、当時の私の日本語指導者は就職活動をするようにと勧められましたが、勉強し続ける思いは強くて、わずかな可能性でもチャレンジしようと決意をしました。そのため、学校の先生方は高校受験までにほぼ毎日の放課後に補習授業をしてくれて、そのおかげで高校に入学することができました。

高校では、中学校とは違って、進学するには試験に合格する必要がありました。来日して1年の私にとってはとてつもない高い壁に見えました。授業にはついていけなくて、周りの人と上手くコミュニケーションが取れず、何回か高校をやめようと思ったことがあります。しかし、2年生になり、新しく担任の先生と出会ったことによって、私の人生は大きく変わりました。相談に乗ってもらったり、特別補習授業していただいたり、いろんな面でサポートしてもらえたので、高校生活に慣れることができ、勉強し続けるモチベーションにつながりました。他の学生との学力のギャップは常に感じ、大学進学は遥かな夢にしか見えませんでした。高校で出会った多くの教師が、希望を与えてくれて、自分を信じてくれたおかげで実現することができました。

大学では語学力を磨き、第二言語取得や異文化コミュニケーションなど自分が経験したことについて学び、外国人が他国で第二言語を取得する際に経験する様々な心境を客観的に学んで、自分自身が取ってきた行動をより理解できるようになりました。

その中で皆様に最もお伝えしたいこと、少しでも理解していただきたいことは、外国人の異文化適応の過程です。異文化適応には5つのステージ（段階）があり、そのステージによって外国人の心境が変わるため、日本語を学ぶモチベーションにつながっていきます。

第一ステージは、自分の文化との共通点や新しいことだけが目に入り、異文化に興味を持ちわくわくしている段階です。第二ステージでは、その人が混乱し始めます。文化の違いに圧倒され自尊心を失い、今まで自分の文化に頼ることで保っていた心理的安定がなくなることを怖がります。戸惑いを感じたり、ホームシックになったりします。第三ステージは、第二ステージの心境がひどくなり、異文化に対して拒絶感を感じる段階です。その文化全てが嫌になり悪口を言ったり、同じ文化に属する人とだけ付き合うようになりします。第三ステージを乗り越えた人は、再びリラックスや共感を取り戻します。この第四ステージでは、文化的な違いや共通点を認め、異文化になじんだ行動が取れるようになります。最終ステージで、文化による違いをプラスと捉えられるようになり、偏見ではなく、一人ひとりのことを見られるようになります。しかし、第三ステージから抜けられないケースは少なくありません。特に、外国人児童学生の多くの場合は、両親の都合で半強制的に自分がそれまでに暮らしていた国を離れ、親戚や友達とも別れます。「居場所」を失うことによって新しい環境に適応するのに反発します。日本語指導者として理解してあげることがその人の語学力発達に大きな影響を与えていると考えています。どうかご理解のほどよろしくお願いします。

昨年の3月に大学を卒業して、今の自分がいるのは出会ってきた方々のおかげだと痛感しています。私は今まで努力してきましたが、その人たちからの支援がなければ、私は決してここまで来ることは出来ませんでした。私の経験から言えば、外国人に日本語を教える方々は、その人の人生に希望や新しい道を与えることができると信じています。今回この日本語支援ボランティア養成講座に参加された方々はもしかしたら現在またはこれから、なにをどうすればいいかわからない、不安な気持ちでいる外国の方と関わることもあると思います。ぜひ、支援をして、希望を与えていただければ嬉しい限りです。

日本語支援ボランティア養成講座

第3回 国際結婚をした私～日本での生活と子育て～

寺山 美妃

日時 9月18日（金）

場所 結城市民情報センター3階会議室

私は台湾出身で、17年前当時台湾に海外赴任の主人との出会いで、結婚しました。その後長女を出産し、その子が1歳になった時に、実家の母に預かってもらい、日本語の勉強を始めました。結婚してから3年後、主人が帰国するのがきっかけで、日本に来る事になりました。

最初に住んだ地域は茨城県の下妻市でした。都会に慣れた私には、田舎の交通不便、スーパーや病院の遠さ、主人に頼らないといけない、一人じゃ何もできない、日本語も少ししか話せない、そういう生活は本当に大変でした。当時2歳になったばかりの長女に、早く日本語を覚えてもらおうと思って、近くの保育園に相談しに行きました。しかし、私が就職していないため、断られました。子供のために何かしてあげたいと思いましたが、やっぱり日本人のお母さんと違って、何もできない自分が辛くて、悔しい気持ちでいっぱいでした。

日本語を上手に話せないから日本人との接触は本当に怖くて嫌いでした。もう疲れた、もう逃げたい、でもこれでいいのかと自分でも迷っていました。1年後主人が日立市へ転勤になり、一人で子育てをすることになりました。なんでも自分でやらないといけない環境で、楽しく幸せに暮らせるように、日本語を勉強して、子供をしっかり教育し、日本人の社会になじもうと決意しました。

下妻市に住んで3年後、主人も戻ってきて結城市に家を建てました。引っ越してからもうすぐ8年になります。長女が通った幼稚園のお母さん方と少しずつ親しくなり、先生たちも応援してくれたお陰で楽しい生活ができました。近所のおばあちゃんもよく長女の面倒をみてくれたり、相談にのってくれたり、本当に助かりました。近隣の人達も優しくしてくださって、結城市がだんだん好きになってきました。

私たち外国人にとっては、子育てで一番困るのは、子供が急に病気になった時です。どこの病院に連れていけばいいのかわかりません。言葉も上手に話せないから、付き添いの

人がいない時、症状をちゃんと先生に伝えられるのか。怪我をした時、一人で救急車を呼べるのか、分からないことがたくさんあります。それが原因で精神面のストレスが大きくなる一方です。

近年結城市では子育て支援や国際交流活動が積極的に始まりました。子育て支援センターや情報センター、日本語教室など連携が進んでいるのですが、利用している外国人は少ないと思いました。私が5年間昼間の日本語教室に通いましたが、その間に長く続けられない生徒さんが多いと気づきました。最近試験を受けるため、夜の時間の日本語教室に通い、その理由が分かりました。その人たちは勉強より友達作りを優先していました。それなら、なぜ子育てセンターなどを利用しないのか尋ねたところ、子供を連れていっても自分が日本語を話せないため、仲間に入れない、行きにくいと話してくれました。学校に入学しても先生と上手に話ができない、保護者の方々も外国人に話しかけてくれる人は少ないかもしれません。自分の居場所はないと感じて、日本の文化や習慣などを教えてくれる人もいないから、日本の生活や人間関係などに馴染めないそうです。

日本での少子化が進む中で、留学やお見合いをきっかけに国際結婚する人が増えていきます。日本という国を全く知らずに嫁いできた外国人のお嫁さんにとっては、その国での子育ては本当に苦勞すると思います。私は偶然市内の病院で、結城市子育て支援センターが発行した応援情報誌を手に入れました。子育てに関しての情報が満載でしたが、日本語でしか書かれていなくて、高いレベルの日本語力を持っていない外国人にとっては、何の役にも立たないと思いました。結城市役所に設けられた外国人相談窓口も、対応言語は2言語だけで、実際どれだけ役に立っているのでしょうか。それは、外国人にしかわからないかもしれません。

子育て支援センターや日本語教室などが、たくさんの外国人が利用できる楽しい居場所になれば心強いです。外国人は日本の事全てがわかるわけではありません。日本人にも外国人のことをもっと理解してほしいです。お互いもっと触れ合って理解すれば、国際交流の絆をもっと深められるはずだと思います。

日本語支援ボランティア養成講座

第3回 結城市での私の生活～研修生として来日して～

ニコム ジャムパーケーオ

日時 9月18日（金）

場所 結城市民情報センター3階会議室

私は去年、2008年6月10日にタイから日本に来ました。今、23歳です。日本の技術を学ぶために、研修生として、日本に来ました。今、結城市の会社で研修して、結城市に住んでいます。今、研修しているのは溶接です。日本に来てから、今まで1年半が経ちました。1年半後にタイに帰る予定です。

日本に来る前にタイの研修センターで4ヶ月間日本語を勉強しましたが、あまり分かりませんでした。日本に来てから、毎週、水曜日の夜7時から9時まで結城市の公民館ののびる会で日本語を勉強したり、毎日、会社の方と日本語で話したり、毎晩自分の部屋で日本語を勉強したりしているので、だんだん日本語が分かってきました。のびる会の先生は色々なことを教えてくれます。とても優しい先生です。会社の方もときどき家から持って来た野菜とか、お菓子とか、ジュースとか、たくさんくれました。とても嬉しいです。

私の趣味は絵を描いたり、写真を撮ったりする事です。運動するのも大好きです。今、冬なので、毎日会社へ走って行くようにしています。アパートに帰る時も走って帰ります。そうすると、体が温かくなって、健康も良くなります。いいと思います。日本は冬の時とても寒いので、運動をしないと、調子が悪くなると思います。今年、私の2回目の冬ですが、ぜんぜん日本の冬に慣れません。タイは暖かい国なので、日本の冬は大変です。両親に心配されています。去年、会社の方たちに毛布をたくさんもらいました。助かりました。良かったです。

私はさくらが咲いているときが大好きです。色々な花が咲いているし、気温もちょうどいいし、見ていて、気持ちが良くなります。今年、4月に結城市のさくら祭り2009が行われました。私は後輩と一緒に見に行きました。子供たちと大人が踊ったり、歌を歌ったりしました。たこやきを食べながら、踊りを見ていて、楽しくて、おいしかったです。お花見もしました。会社の皆と一緒にさくらの下でご飯を食べたり、ビールを飲んだり、色々なことを話したりして、とても楽しかったです。来年、また行きたいと思っています。日本は色々なお祭りがたくさんあります。おもしろいお祭りもあります。日本人にとって、

普通なことだと思っていますが、私とほかの外国人にとっては、おもしろいことだと思っています。

日本の習慣もおもしろいです。しかし、外国人は気をつけなければなりません。タイの習慣と日本の習慣はぜんぜん違いますから、失礼なことをしてしまったか、わかりません。これから、日本に住んでいるうちに、失礼なことをよく注意して、日本の習慣のことをよく勉強するようにします。そして、タイの習慣も日本人に伝えたいと思います。

日本には有名なところがたくさんあります。富士山とか、東京ディズニーランドとか、日本に住んでいるうちに、一度行ってみたいと思っています。お金をたくさん払いますが、たのしみです。この前、自転車で筑波山へ行きましたが、筑波山に着いてから、空がだんだん暗くなってきたので、筑波山の上に登れませんでした。せっかく筑波山に着きましたが、登れず残念でした。アパートに帰るときは、急いで帰ったので、とても疲れましたが、たのしかったです。次回は電車で朝早く行ってみます。日本はすごく便利だと思います。どこも電車が通っています。タイは北線と南線と東線と西線と東北線だけしかありません。どこかへ行く時は、バスとか自分の車で行かなければなりません。

私は去年、はじめて電車に乗りました。去年の日本語の試験は茨城大学で行われたので、一人で水戸市へ行きました。そのとき、日本語はまだ分からないし、電車に乗ったことがないし、とても不安しました。そのとき、駅の係員に聞いたので、助かりました。今は日本語がだいたい分かりますから、もう大丈夫です。日本に住んでいるうちには、やりたいことがたくさんありますが、機会がないし、案内してくれる人もいないし、一人でやるのは、困ると思います。

このように日本で生活していますが、私は私の家族に会いたくたまらないです。以前は、両親と離れたことがありませんでしたが、今、大人になったので、だんだん両親と離れるようになりました。タイに帰ってから、今度は家族を日本に連れて来たいと思っています。私が過ごした日本を、家族にも見せたいと思うからです。

今、日本には、たくさんの外国人が住んでいます。私が住んでいる結城市にもたくさんいます。日本人と外国人が一緒に生活することはとても大切なことです。ところが、外国人は日本のルールがわからないし、日本の習慣も分からないので、仲良く生活するのは難しいと思います。もし、日本のルールと習慣を教えてくれたり、色々な活動をよく一緒にしたりすると、もっと仲良くなると 생각합니다。外国人が怖がらないで一緒に活動すれば、

日本人の考え方も少しずつ変化すると思います。私は結城市で後 1 年半頑張ります。日本人と仲良くするのもたのしみにしています。

日本語支援ボランティア養成講座

第4回 ペルシャ語講座の報告

ナジミ フェレシテ

日時 10月2日（金）

場所 結城市民情報センター3階会議室

結城市主催「文化庁委託事業「生活者としての外国人」のための日本語教育事業（日本語支援ボランティア養成講座）第4回」において、講師を務めました。講義は「異文化体験をしよう ～ペルシャ語で“こんにちは”～」と題するもので、日本語を使わず、ペルシャ語だけでペルシャ語を教え、受講生には語彙・フレーズを習得する内に、学習者の心理的立場を体験してもらうことで、異なる言語の学習がもつ喜びと難しさを学んでもらうものでした。

第2言語学習者は一日のうち習得できる単語は7から10個なので、以下の単語とフレーズを使っの授業にしました。

Salam（こんにちは）

Man fereshte am. Shoma?（私はフェレシテです。あなたは？）

Man（それぞれの氏名）am.（私は〇〇です。）

Sargarmiye shoma?（趣味は何ですか？）

Safar（旅行）

Varzesh（スポーツ）

Musighi（音楽）

まず、自分の名前を言い、相手の名前を聞くやりとりです。

A: salam

A: Man 〇〇 am. Shoma?

B: Man ●● am.

私が自分の胸に下げたネームプレートを持ちながら、Man fereshte am.を何度か言いました。受講者の方々は私が名前を言っていることがわかりました。そこで、Shoma?と、一人の受講者の方に言ってみると、自身の名前を言いました。そこで、ジェスチャー、表

情を使い、ペルシャ語で褒めると、それも伝わり、次の人、その次の人も自分の名前を言うことができました。私は机の間を歩きながら全ての受講者の方々近づけるよう心がけ、口頭練習、チェーンドリルをしました。

次に、趣味を聞きます。

Sargarmiye shoma

safar

Sargarmiye shoma

Musighi,.vaszesh

「趣味を聞く」という導入で少し手間取りましたが、受講者の反応を見ながら進めました。旅行、音楽、スポーツを説明するために、絵カードと旅行のガイドブック数冊を提示しました。趣味を聞き合うフレーズを十分に口頭練習した後は、インタラクティブ用に用意した紙をそれぞれに1枚ずつ配り、教室の中を歩きながら5名程に趣味を聞き、用紙に書き込むアクティビティを用意しました。受講者の方々は積極的に参加していました。

以上はペルシャ語の音声に馴染んでもらうよう設定された会話ですが、実際学習者は音声だけでなく文字も学習しなければなりません。そのため、文字に触れる体験として、文字カードを作りペルシャ文字をブロックの形で受講者の方々に提供することにしました。ブロックの形にする理由は、36のペルシャ文字を一回の授業で教えるのは多いと考えたからです。一つの授業ですべての文字を学生に教えることは無理がだからといって教えないわけにもいけない。それで設定された文型だけの文字をブロックの形で教えることにしました。

グループの中での練習以外にも、学んだペルシャ語を他のグループの学生と練習し、定着していきました。全ての受講者の方々は日本語を共通言語としているにも関わらず、とても積極的に授業に参加し、他グループとのコミュニケーションもペルシャ語で行っていました。笑いも絶えず、楽しい時間でした。

受講者の方々はペルシャ語を外国語として2時間ほど、学びました。それから数ヶ月経って今私がこの報告を書いている今頃、その日学んだペルシャ語を覚えている人は少ない

でしょう。しかし、ペルシャ語の授業を受けた方々にはコミュニケーションを図る際に、たとえ、媒介語がなくても工夫をすれば、外国人との意思伝達ができると伝わったのでしょう。また、あせらずに、相手に学ぶ時間やチャンスを与えれば目的に達することができることも学んでいただけたと思います。これからも結城市が市民の温かい心でより輝いていくことを願っています。

日本語支援ボランティア養成講座

第5回「日本語の教え方の基礎（1）」

松浦 みゆき

日時 10月9日（金）

場所 結城市民情報センター3階会議室

1. はじめに

日本語支援ボランティアを始めようという人に共通する思いとして「地域で暮らす外国人の皆さんのために、何か役に立つことができれば」というものがある。

【具体例】買い物に行きたいけれど、日本語がわからない外国人のために。

支援者A：言葉、文法、会話などを教える。（日本語教育の知識）

支援者B：日本語教育の知識はないが「買い物なら一緒に行きましょう。」という支援。

一般的に、日本語支援というと、日本語教育（支援者A）というイメージがあるが、外国人にとっては、支援者A、支援者B、ともに必要な人であり、むしろ、後者が多くいてくれた方が、その人の生活は、豊かに広がっていくものと思われる。3回にわたって「日本語の教え方の基礎」として、支援者A向けの講習を行うにあたり、日本語支援の形は多様であり、言語教育以外の支援（支援者B）も非常に重要であることを確認した。

2. 外国語としての日本語

私たち日本人が生まれたときから聞いている日本語は「国語としての日本語」であり、外国人が学ぶ日本語は「外国語としての日本語」である。日本人だから日本語が教えられるという意識を持っているとしたら、まずは、それを変えなければならない。母語として慣れ親しんだ日本語を、外国語として客観的にとらえ直すには、トレーニングが必要である。

日本語を教える時には、外国人にとって、日本語の何が難しいのかに気づくことが大切なので、「文字・表記」「発音」「助詞」など、いくつかの具体例をあげて、普段無意識に使っている日本語の意識化を試みた。

3. 国文法と日本語教育文法との違い

動詞の活用は、動詞を3つのグループに分けて教えることや、活用形に「て形」「た形」「ない形」「辞書形」など、独特の名前があること、形容詞と形容動詞を「い形容詞」「な形容詞」と呼ぶことなど、受講者の皆さんが、学生時代に勉強した国文法と、日本語教育文法には違いがあることを紹介した。

4. 受講者の感想

- ・外国の方の話も交えて、楽しい講習だった。実際一緒に行ってあげるといふ存在も大切だというのは、例を聞いてなるほどと思った。
- ・日本語なら教えられると思いがちだがというお話は、のびる会での3カ月で感じていることだった。でも、教科書を教えるだけではないコミュニケーションを心がけています。
- ・松浦先生のおっしゃったように、学校教育の延長で日本語教育をするよりも、多文化共生としての外国語教育が大切だと思った。
- ・私はどちらかといえば、買い物について行くタイプの教え方ができればいいなと思った。
- ・母語と日本語の音が一致しない時は覚えにくいだろうと思った。私たちが日本語にない発音がなかなかできないのと同じだと思った。
- ・普段意識しないことをことさら説明しなくてはならないとなると、難しいものだなと思った。
- ・日本語を上手に話す外国の人は本当によく勉強したのだなと思った。外国語としての日本語文法というものがあるのを初めて知った。
- ・日本語文法は教えるという観点から考えられた文法だと思った。
- ・国文法としての日本語は名称も複雑だが、日本語文法としての日本語は名称も簡易であり、とりつきやすいと思った。
- ・覚えれば日本語文法はなるほどわかりやすい。国文法を忘れた方が覚えられる。
- ・国文法はちょっと抵抗があるが、日本語文法なら具体的で分かりやすいので、日本語のルールを教える時に教えやすいと思った。
- ・これはよく経験することなので、理詰めにならなくて面白いと思った。
- ・日本語をこんなに考えたことはなかった。最初に見せてもらった活魚なども読み方を意

識はせずに見ていることが改めてわかった。

- ・改めて日本語のルールや使い方を意識させられた。
- ・日本語の難しさを改めて感じたが、興味がわき、さらに勉強したいと思った。
- ・とても難しかったけれど時間の経つのが早かった。良い勉強になった。
- ・生まれ育つ中で習得する言語は、ほとんど意識することなく使っているだけに、日本語をこれから覚える外国人に教えることの難しさを感じた。
- ・日本人でいながら何気なく使っている言葉にもああそうだ！と思うところがあった。少々難しかった。

日本語支援ボランティア養成講座

第6回「日本語の教え方の基礎（2）」

松浦 みゆき

日時 10月16日（金）

場所 結城市民情報センター3階会議室

1. 動詞の活用とグループ分け

外国人学習者によくある間違いを例に挙げ、受講者の皆さんに、なぜそのような誤用が生じるのかを考えてもらった。

例「毎朝シャワーを浴ぶ。」

あそびます → あそぶ

とびます → とぶ

さけびます → さけぶ

あびます → あぶ（誤用）

動詞が「～ます」の形で使われるとき「～びます」という同じ形をしていても、「辞書形」になると「あびます」だけ形が違っている。「あそびます」は国文法の五段活用動詞で、「あびます」は上一段活用動詞である。受講者の皆さんは、外国人学習者は、この文法を知らないために、上記のような間違いが生じるということが理解できたようだ。普段無意識に使っている日本語に、そのような規則性があることに一様に驚いていた。

さらに、日本語教育では、動詞を3つのグループに分けて教えること、国文法の五段活用動詞を1グループ、上一段・下一段活用動詞を2グループ、カ行変格活用・サ行変格活用動詞を3グループと呼ぶことなどを紹介した。

2. 学習者は何を難しいと感じるのか

初級文法の一つの山といわれているのが「て形」である。講師が創作した、耳慣れない動詞で「て形」を作る体験を通し、受講生の皆さんに外国人学習者の気持ちを実感してもらった。

【受講者の感想】

「意味のわからない単語の活用がこれ程難しいとは思わなかった。良い経験になった。」

「頭が動かなかった。外国人の日本語学習者の頭の中が分かった気がする。」

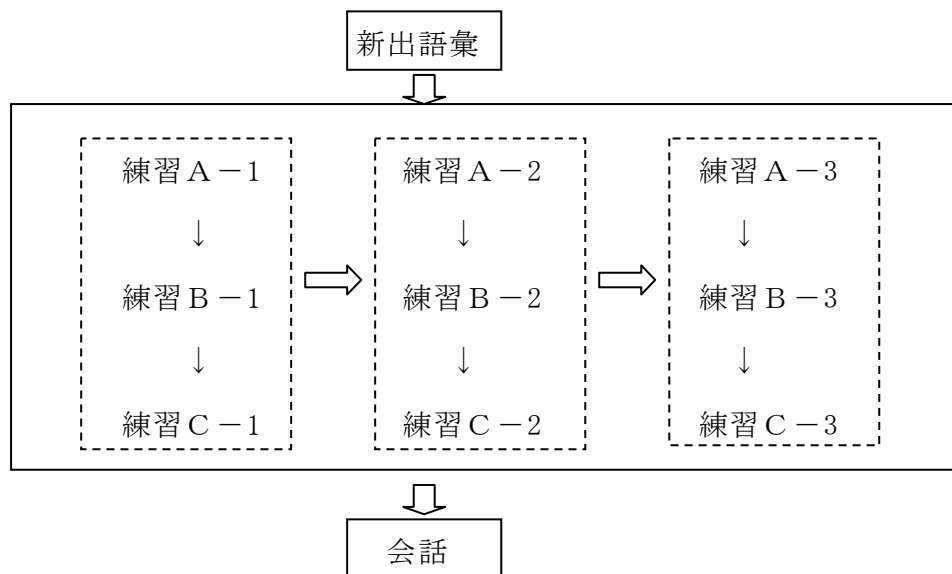
「学習者はこのような操作を頭の中でしながら「て形」を作っているのかということがわかって良い経験になった。」

「このようにして日本語を学ぶのかと驚いた。」

「日本語文法の規則性が分かって面白かった。ルールのわからないゲームをやった感じ。」

3. 『みんなの日本語初級』の構成と副教材の紹介

結城市のボランティアグループ「のびる会」でも使っているという、初級の代表的な教科書『みんなの日本語』を周辺副教材とともに紹介した。この教科書は、本冊のほかに、丁寧な教え方の手引き、絵カード、翻訳・文法解説書など、豊富な副教材が揃っている。構成に特徴があり、日本語学校などでは、前のページから順番に教えるのではなく、文型ごとに基本練習→応用練習と、輪切りで進めていく方法をとっている。今回は、その方法を紹介した。



第7回の講義で、模擬授業を見せる予定の『みんなの日本語初級Ⅰ』13課を取り上げて、練習A→B→Cの分け方を実習してもらった。

【受講者の感想】

「多くの副教材が揃っており、学習者へ理解させるのには絵が一番有効かと思う。」

「テキストの構成は横割りの構成で、継続して学ぶので、学習者にとって学びやすい。」

「教える側は、どの問題がどの文法事項なのかを理解していないと教えられないので、

予習が必要だ。教える人に負担が多い。直接法の短所が教える人にかかる。」

「ABC と横に勉強させることを初めて知った。指導本には一覧になっているので安心。」

「内容整理が苦手で、モチベーションの低い学習者は横に教えるのとつつきやすいかと。」

「これまでの経験、実績によりつくられているので、使いこなせるようになることが第一歩かな。ただし、時代の変化に合わせより実用的な教材とする工夫が必要かな。」

「文法的なことはあまり意識していなかったが、このように系統立ててやってくださると、自分の学習にもなってよかったです。」

日本語支援ボランティア養成講座

第7回「日本語の教え方の基礎（3）」

松浦 みゆき

日時 10月23日（金）

場所 結城市民文化センターアクロス2階練習室

1. 授業の流れを考える

後半で模擬授業を見せるにあたり，授業の流れを説明した。

新出語彙導入・・・言葉の意味と発音。

↓

文型導入・・・・・・どんな時にどう使うのか，学習者にわかりやすい場面を提示する。

↓

要点整理・・・・・・板書。目で見えて確認できるように。

↓

確認・・・・・・誤解なく導入できたかどうか。「わかりましたか？」は意味がない。

↓

基本練習・・・・・・何度も繰り返して，とにかく口に出してみる。

↓

応用練習・・・・・・多少の間違いは気にしないで，どんどん使ってみる。

2. 練習方法の紹介

リピート，代入練習，変換練習，応答練習，インフォメーションギャップを利用した練習，ロールプレイなどを紹介し，受講者にも体験してもらった。

3. 模擬授業

のびる会に通っている初級学習者（ベトナム人）3名の協力を得て，講師が『みんなの日本語初級Ⅰ』13課「私は～がほしいです」の模擬授業を見せた。感想を見る限り，百聞は一見にしかずであったようだ。

【受講者の感想】

「絵カードやイラストなどを使いながらの語彙，導入，要点，確認，基本練習，応用までの授業の流れで教えれば私にもできるかなと感じた。」

「授業の流れや模擬授業を見せていただいて良かった。やはり，繰り返しやっていくことで学習者の方々も分かりやすかったと思う。」

「口頭練習がとても多かった。媒介語を通しての理解ではないので，絵カードなどの準備がかなり必要だと思った。」

「実際にやっているのを見ると，流れがよくわかる。」

「もっとしっかり日本語の教え方を学んでみたい。難しさもあったが興味がわいた。」

「これまでの学習内容の重要性が理解できた気がする。」

「口頭練習を沢山やっていくことで，言葉が出しやすくなると感じた。聞く・話すが関連して練習できることが，話せるようになるために大切だと思った。」

「流れが少しずつ分かってきたような気がする。若い人との記憶力の差を感じた。」

4. 第5回～第7回のまとめにかえて

三回にわたって，短時間にかなり本格的な日本語教育の話をしてきたので，戸惑った方もいたようだ。そこで，多文化共生社会の日本語支援は多様であってよいことと，この「日本語の教え方の基礎」で取り上げた方法が唯一の方法ではないことを再確認した。考えられる支援者の役割として，以下のようなものを挙げた。

◎言語教師としての役割（専門的な知識）

◎辞書的な役割

◎母語話者のサンプル的な役割

◎地域生活者として必要な知識を教える役割

どの役割においても，自分の言語活動を客観的に振り返って，外国人にとってわかりやすい日本語（やさしい日本語）を意識することが重要ではないか。また，言葉の壁があって，できないことが，できるようになるまでには，相当な努力が必要になるが，「できない」と「できる」の間に「助けを借りればできる」というカテゴリーを認めれば，地域在住外国人の活躍の場は格段に広がり，より豊かに暮らしていけるようになるだろうということを提案した。

今回、ご縁をいただき、結城市にこれだけ多くの有志がいることを知り、頼もしく思った。微力ながら、講座を通して、結城市の多文化共生事業の役に立つことが出来たとしたら幸いである。「日本語支援ボランティア養成講座」事務局、及び、実行委員の皆様に、講座のスムーズな運営のためにご尽力いただいたことを感謝して、報告の結びとしたい。

結城市日本語支援ボランティア養成講座

第8回 やさしい日本語の作り方

角田 亮子

日時 10月30日（金）

場所 結城市民文化センターアクロス2階練習室

1. 目的

日本人と外国人がコミュニケーションを図ろうとした際、共通言語が日本語のみという場合が多々ある。日本人は相手の言語ができないことで接触することを気兼ねする傾向があるが、私たちが普段使用している日本語を易しい形に変えることで、いくらかコミュニケーションが図れることを知る。また、普段の日本語をやさしい日本語に変える練習をし、実践に近付ける場とする。

2. 活動内容

① “やさしい日本語” についての説明

弘前大学人文学部社会言語学研究室のHPを参考（了承済み）に受講者に説明した。

- ・やさしい日本語の対象者について
- ・通常の日本語とやさしい日本語に言い換えたものの比較
- ・分かち書き（例：ここに 名前を 書いて ください）、言い換え（例：無料→お金は いりません）、漢字やルビの使用について、二重否定の使用について等の説明

角田自作のプリントを使用し、やさしい日本語の作り方のルールを確認しながら、ところどころやさしい日本語に書き換える活動を行った。箇所によっては受講者に発表してもらったり、意見を出してもらったりした。

②やさしい日本語で書く練習

通常の日本語で書かれた文書をやさしい日本語に書き換える練習を行った。結城市ホームページに掲載されている「外国人相談窓口の案内」のページを使用した。通常の日本語で作成されたこのページのコピーを受講者各1枚で配布し、別紙に“やさしい日本語”に書き換える練習。20分程時間をとった。受講者は近場の人と少し相談しながら進めていた。

最後に数名に部分的に発表してもらい、まとめとして、角田なりのやさしい日本語に書き換えた案内を提示した。

③やさしい日本語で話す練習

インフォメーションギャップを利用した活動を行い、やさしい日本語を使用して意思疎通を行う練習をした。

まず、近くの席の者で2人組を作る。Aさん、Bさんを決め、それぞれにカードを配る。設問を2つ用意し、1つ目はAさんが日本人役、Bさんが外国人役とした。2つ目はその逆。外国人役は使用できる日本語に制限をかけるため、使用可能な語彙をカードの中であえて提示した。

ペアで会話をした後、お互いのカードを見せ合い、情報を教え合った。

Aさん（日本人）

のびる会の活動のため公民館へ来ました。今、外の駐車場を歩いています。

日本語のクラスは夜7時からです。今は6時45分です。

外の自転車置き場に、最近勉強しに来始めた外国人がいます。教室に行かずに1人でうろうろしています。

どうしたのでしょうか。声をかけてください。

Bさん（外国人）

のびる会で日本語を勉強するために公民館へ来ました。今、外の自転車置き場にいます。さっき教室に行ったら、日本人の先生たちはいましたが、生徒は誰もいませんでした。

日本語のクラスは夜の6時半からですが、今は6時45分です。

今日は授業がないようだし、なんだか不安なのでこれから帰ろうと思います。すると、1人の先生に会いました。話をしましょう。

【使える言葉】

はい、いいえ、6時半、友達、先生、います、いません、

勉強します、勉強しません、帰ります

3. 振り返り・まとめ

やさしい日本語というものを以前から知る受講者はいなかった。初めて知る実用的なコミュニケーションの手段に皆関心を持ったようだった。外国人相談窓口の案内をやさしい日本語に書き換える活動は難しかった。単純な語は簡単なものに書き換えられるが、日本語能力試験3級レベルがどの程度のものかも受講者はわからず、文法的に単純なものを作ったり、余計なものをそぎ落としたりすることなどがなかなかできなかった。

やさしい日本語で話す練習では、難しいと言いながらも上手にこなしている人がいた。「外国人と話をする際、少しを聞いて自分なりに解釈するのではなく、一つの言葉から様々な可能性を探り最後まで話を聞く必要があると思った」などの感想が挙げられた。

やさしい日本語はルールを説明しても、使いこなすには経験が必要だと改めて感じた。しかし、このような手段を知ったことが、日本人たちが外国人と接触する際に少し背中を押すことに繋がると良いと思う。やさしい日本語でのコミュニケーションを懸念する声もあるが、日本人が外国人と接触し、きちんと向き合うきっかけになれば良いと考えている。

日本語支援ボランティア養成講座

第9回 外国人と交流しよう

角田 亮子

日時 11月6日（金）

場所 結城市民情報センター2階会議室

1. 目的

これまでに受講者は、共生問題の実情や今後の可能性、日本語の教え方や外国人とコミュニケーションを取る方法を講座内で学んできた。それらを、第9回と第10回の2回で、実際に結城市に住む外国人と関わりながら実践する。コミュニケーションがうまくとれなくても、外国人と関わる一歩を踏み出す機会とするのが今回の目的である。

2. 活動内容

①自己紹介ゲーム

日本人、外国人関係なく、7名と自己紹介のやりとりをする。

各人に用紙を1枚ずつ配る。自由に室内を歩き、1対1で自己紹介をする。名前と、共通点の一つを見つけ出し（2人とも眼鏡をかけている等）、用紙に書き込む。終わったら席に着く。

②部屋の四隅

部屋の四隅に実行委員がスケッチブックを持って立つ。角田が質問をし、日本人・外国人がそれぞれ当てはまる箇所に移動する。集まったメンバーで意見交換をし、その後数名に発表してもらう。

質問事項：どの言葉を話す？（こんにちは、ニーハオ、シンチャオ、ありません）

どの季節が一番好き？（春、夏、秋、冬）

今日は何で来ましたか？（歩き、自転車、車、その他）

納豆は好き？（大好き、まあまあ好き、嫌い、食べたことがない）

日本語は世界で一番難しい言葉だと思う？（そう思う、まあそう思う、あまり
そう思わない、絶対にちがう）

③ゴミの分別（グループ活動）

各グループに配った物：

ゴミ（可燃物，不燃物，リサイクル可能なもの），市役所生活環境課が作成したゴミの分別の資料，ポストイット，メモ用紙。

まず，机を移動し，日本人４人・外国人２，３人での６グループを作った。

次に各グループに配布した物を使用し，グループ内で日本人と外国人が相談しながら分別を行った。

グループで活動をした後，２グループに前に出てもらい，全員の前で分別を披露してもらった。きちんと分別ができているかの判定は，日本人受講者で日頃から地域の環境やゴミの分別に携わっている方をお願いした。

３．振り返り・まとめ

①の自己紹介ゲームでは，今回初めて顔を合わせた日本人と外国人が知り合い，和やかな場を創り出すことができた。また，１回から８回まで共に勉強してきた日本人同士も，再度お互い知りあうきっかけとなった。初めは意外にも日本人の方が積極的に外国人に話しかけていたが，すぐに外国人も慣れ，知っている日本語で楽しそうに会話をしていた。話が盛り上がり，時間内に２名程としか自己紹介をしない人も多かった。

②の部屋の四隅では，国籍関係なく，考え方が同じだったり，違うことがあったりというのを体験した。ゲームのルールもすぐに理解でき，皆思い思いに部屋の中を移動することができた。好きな季節を聞いた時，春，夏，冬それぞれにタイ人が移動した。理由を聞いてみると，桜がきれいだから，タイのように暑い夏が好き，日本にはタイでは見られない雪があるからと，それぞれに意見があり，聞いている日本人も納得していた。日本人も外国人も，個々の違いや共通性に触れ，国という枠でそれぞれを見る必要がないことを感じられただろう。

③のゴミの分別では，日本人は自分たちの使う日本語をやさしい日本語に言い換えたり，ジェスチャーや絵を使用したりしながら，外国人に様々なことを説明しようとした。ゴミの分別は日本人にも難しく，意外にも日本での生活の事前研修を受けてきた研修生の方が知っていることも多かった。前に出たの分別の発表では，分別が正しいかどうか判断する

ジャッジとして受講者の方が出てきてくれたため、より盛り上がった。外国人は、空き缶をつぶして捨てることに驚き、次回からそのように捨てると言っていた。日本人は、外国人にとって難しいもの（可燃物などの言葉）や、自分たちも知らないことが多いことに気がついた。共に気づきの多い時間になった。

日本語支援ボランティア養成講座

第10回 外国人と交流しよう②

角田 亮子

日時 11月13日（金）

場所 結城市民情報センター2階会議室

1. 目的

前回に引き続き、外国人と一緒に活動することで、外国人に接触することに慣れる。個々の良さをみつける活動を通し、“日本人対外国人”だけではなく、“個人対個人”で関わる感覚を知ってもらう。また、異文化に接触した際に、異質な物を排除するのではなく、それらを長所として受け止める感覚を養う一歩とする。

防災に関するタスクを取り上げることで、日本人受講者は外国人参加者にいかに情報を伝えるか工夫し、講座後も地域の外国人と接する機会があった際に活かせるようにする。

2. 活動内容

①いいところ探し

6グループ（日本人4人、外国人2人）を作った。各人に1枚ずつ用紙を配り、ゲームの説明をした。用紙を折り、自分の名前を記入し、時計周りに紙を回していく。用紙に記入された名前の人の長所と一つ書き込み、用紙を左隣の人に回す。これを繰り返す。全員分記入し終わったら、自分の用紙を見て、グループ内で話をした。最後に、外国人、日本人数名にみんなの前でどんな意見が出たか発表してもらった。用紙に記入する際、外国人も日本語を使用したけど、何語を使ってもよいという設定にした。中にはタイ語で記入した者もいた。最後にグループ内で話す際に、タイ語を日本語で説明し、意思を伝えていた。

②防災のタスク

配布物：地震の時のガイド、市内避難場所マップ、防災グッズの紹介ページ（各資料とも結城市役所作成）、自作プリント

グループ活動とした。各グループに資料を配布し、進め方もグループメンバーに任せた。まず、全体に対して角田が日本での地震被害について説明をした。次にグループごとの

活動に入り、防災グッズ、市内の避難場所、地震が起きた時の対応などを確認しあった。

3. 振り返り・まとめ

初めに行った“いいところ探し”では、外国人参加者が“長所を書く”ということを理解するのに時間がかかってしまった。中には、「今日は寒いです」と書いた者がいた。説明をし直して、再度書くなど、臨機応変に対応した。タイ語で書かれた自分の長所を日本語で話し合うグループは、言語を駆使してのやりとりで盛り上がっていた。まだ知りあつて間もないメンバー同士でも、自分の長所を指摘してもらうのはとても嬉しいもので、楽しい活動であったことが受講者の感想からもうかがえた。

次に行った防災のタスクでは、まず、日本地図を提示し、いつ頃日本のどこで大きな地震があったかを確認した。日本人受講者は全員「地震は怖い」と思っていたが、地震を知らない国から来た外国人参加者たちの中に「地震は怖い」と思っている者はいなかった。日本人受講者は、外国人の地震に対する意識がどのようなものか知ることができただろう。グループ活動では進め方はグループに任せたが、基本的には角田の自作プリントに沿って進めた。震度の大きさ、用意しておくべき防災グッズ、地震が起きた時の対応、避難場所の確認を行った。

受講者の中には日頃から町内で防災に関わっている者もいて、それぞれの知識を活かしながら活動していた。また、8回目で行ったやさしい日本語の作り方を活かし、言葉を言い換えたり、ジェスチャーを使ったりするなどしていた。普段から笛を持ち歩いている者が実際に笛を吹いてみたり、人ががれきの下敷きになる様子を机の文房具などを利用したりしながら説明するなど、グループによって様々な形でやりとりが行われていた。

ただ、どんなに外国人と一緒に活動しようという気持ちのある受講者でも、懸命に活動に取り組むあまり、日本人主導のペースになり、外国人の様子や理解度を伺えずに進む様子も多々見られた。最後にそれぞれのグループに「今日は何がわかりましたか」と質問した際、ある外国人参加者が「何もわかりませんでした」と言った。その場では冗談だと受け止めたが、もしかしたら本当にそう思ったのかもしれない。相手を思いやる気持ちがあっても、相手のペースに合わせ会話を進めるのは容易ではないと感じた。外国人とコミュニケーションを取るには、経験を積むことも必要なのだろう。今回の講座での外国人との接触は、受講者にとってコミュニケーションを図る難しさと面白さに気づく機会となった

だろう。外国人参加者も、日本語教室以外でこれほど多くの日本人と関わるのが今までなかったという者が多く、大変楽しかったという感想が多かった。また、前回のゴミの分別、今回取り上げた防災など、こういったことをもっと早くに知りたかったという声も多かった。今回講座に参加した外国人は日本語教室に来ている者で、普段から日本人と接触する機会のある者たちだが、そんな彼等に対しても日本で住む上で必要な情報を、どれだけ提供できていたのか考えさせられた。